

大きな歴史的 一步を 踏み出した偕行社

「偕行社」から

「陸修偕行社」へ

偕行社常務理事・安全保障委員長
火箱 芳文 陸自74

はじめに

偕行社と陸上自衛隊幹部退官者の会（陸修会：以下陸修会と呼称）との第5回合同協議が、令和5年1月10日偕行社会議室で行われ、偕行社代表専務理事奥村快也氏、陸修会代表宮下寿広氏との間で合意文書が交わされました。

令和4年8月より5回にわたる合同協議を重ねた結果ようやく合意に達したのです。偕行社常務理事・安全保障委員長、運営企画会議のメンバーとして、また陸修会の設立準備委員及び陸修会の副理事長として設立に関わったものとして、今回の合意は偕行社の将来に向けて大きな歴史的な一步を踏み出したものであり歓迎したいと思います。

合意の内容は、①合同後の組織の基本的考え方は現在の偕行社の目的、新たな偕行社のあるべき方向（理念）及び偕行社が行っている定款に

記載のある事業を全て引き継ぎ、「陸自幹部退官者全員に開かれた会」「全会員に魅力ある会」「陸上自衛隊の現役に役立つ会」との陸修会の会運営の基本理念を引き継ぐこと。②合同後の名称は「公益財団法人陸修偕行社」とすること。③会員規程として「偕行社規定の「普通会员」「家族会員」「賛助会員」「名誉会員」の枠組みとし、普通会员は「旧軍関係者と幹部自衛官退官者等」の枠組みとする。（幹部退官者等の等は准尉とする）。④その他本部と支部の関係など合同後に具体化すべき事項が含まれています。

今後偕行社では本合意事項等を3月の通常理事会で審議し、3月の臨時評議員会に報告された後、6月の定時評議員会で承認を受けることとなります。陸修会は3月の理事会で決議され、4月21日の陸修会定期総会で最終承認を受けることとなります。内閣府へは名称変更届を行い、合同の正式表明は令和5年10月6日予定の「偕行社」総会からとなります。

1 偕行社の改革

偕行社は明治10年修養研鑽と親和

団結を目的とした陸軍の現役将校の会として設立され、明治・大正・昭和に亘る我が国の近代国家建設の過程において、陸軍を支え社会の架け橋となる重要な役割を果たしてきました。

戦後、偕行社は陸軍の解体と同時に廃止されましたが、昭和32年陸軍の有志によって戦没者の慰霊顕彰や陸軍関係の戦争犠牲者の福祉増進などを目的として再建されました。

時代が昭和から平成に移行した頃偕行社の在り方が検討され、本来は同窓会組織であり従前会員数の減少に伴い自然消滅を是とする考えの会員と陸自退役幹部にも会員資格を拡大すべきだと言う会員との間で真剣な議論がなされ、最終的には陸自退役幹部に会員を拡大、将来は元自会員に後事を託すとの結論を得て、平成13年には陸上自衛隊退職幹部自衛官有志も加わり、財団法人として運営されてきました。

平成23年戦没者の慰霊顕彰に加え安全保障に関する研究と提言や自衛隊に対する必要な協力を行う公益財団法人に移行し、偕行社の運営は陸上自衛隊退職幹部自衛官の有志が主体となって運営しています。

筆者は退官後直ぐに当時の富澤安全保障委員長のお誘いを受け、安全保障委員会の末席で「安保講座」や「シンポジウム」の開催などのお手伝いをしながら、慰霊祭等の偕行社の諸行事等に参加してきました。その行事等に参加する度に、偕行社は、途中中断はあるものの創立から140数年あまりの陸軍の長い歴史と伝統を持つ組織であり、「偕行」という名称は中国最古の詩篇「無衣」にある「一旦緩急あれば衣服を分け合つても偕に馳せ参ぜよう」という意味からも陸自幹部退官者が加入し継承していくべき組織であると強く意識するようになっていきました。

富澤閣下の後を受け安保委員長を引き受けた後、偕行社の将来を考える偕行社改革プロジェクト（座長白石元専務理事他各委員長）に参加して偕行社の現状を承知する立場になって初めて気づかされたことがあります。陸軍出身者の高齢化に伴う従前会員の急激な後退及び元自会員の加入者の鈍化による会員の減少、九段の偕行社ビルの賃借負担料増、経済情勢の悪化に伴う資産運用益の大幅減少によって、偕行社は恒常的な赤字体質が定着、このままでは概ね20

年で資産枯渇により活動停止が余儀なくされることを承知したのです。

この伝統ある借行社を存続させるか、いずれ解散するかは瀬戸際にあること、存続するならば改革を断行しなければ明日の借行社はないと言ったのが「プロジェクトチーム」の結論であり、当時の冨澤理事長に報告されました。

冨澤理事長の後を受け新たに平成30年、森理事長が着任しました。解散か存続させるかの判断を任された森理事長は、存続を願う借行社の従前会員、元幹部自衛官等の思いを受け止め、「存続させるための改革」と「陸自幹部退官者の後輩達に組織的に継承させる」との方向性を指示されました。

借行社の歴史と伝統を継承しつつ英霊の慰霊・顕彰や陸自への協力等の事業を実施し、公益財団法人として活動を継続する組織の存続のため、奥村専務理事を座長とし各委員長からなる「体制移行準備・実行委員会」（山越事務局長まとめ）を借行社内にて正式に発足させ、毎週のように議論を重ねてきました。

財務体制を改善し、事業を見直し、コンパクトで効率的な借行社に移行し、

り支えられた持久力のある新体制に移行する必要があるとの認識のもとに、借行社の将来の在り方の検討、賃借社屋を返却、買い上げ社屋とし、一部の流動資産の不動産への転換による資産の安定化と効率化、事務局の縮小等人員費の削減、借行誌の発行回数等の低減等各種事業の見直し・精選等による支出の大幅削減を図ってきました。

また収入を増やすため、個人・法人会員の拡大、会費及び寄付金収入の向上を図るとともに、カレンダー等の売却など新たな収入増に努めてきました。

将来の借行社の在り方検討の中で借行社の目的、会員制度、事業内容、運営組織など内閣府と調整し定款を整理、変更等を行い、英霊への慰霊顕彰は勿論のこと陸上自衛隊への協力支援を行う組織へ転換するなど、将来の陸自幹部退官者の会との合同を睨みながら改革を一つ一つ具体化していったのです。

令和4年度からは陸上防衛戦略を含む安全保障等に関する調査・研究・提言及び普及を行うとともに、陸上自衛隊に対する必要な協力、英霊顕彰等を行う新たな借行社に移行し、

陸上自衛隊に対する支援を重視する活動を開始したところです。

以前に比べれば財務体制は大幅に改善されてきていますが、安定的に会の運営を行うためには更なる会勢の拡大に努めることが必要であることから、「陸自幹部退官者の後輩たちに組織的に継承させる」ため、旧陸軍関係者の同窓会的組織である借行社の受け皿となる組織、「陸自幹部退官者の会」を作る必要性に迫られていました。

2 陸修会（陸自幹部退官者の会）の発足

自衛隊の退官者の会には自衛隊退官者全体の公益社団法人「隊友会」、陸士等卒業生・自衛隊退官者幹部有志の公益財団法人「借行社」、海兵等卒業生・海自退官者幹部有志の公益財団法人「水交会」、空自退官者幹部有志の任意団体「つばさ会」等があるが、陸自の幹部退官者の会は存在していませんでした。

借行社という組織を引き継いでもらうためには陸自の有志ではなく一定の組織が必要だと森理事長の強い意志に基づき、令和3年7月幹部退官者の会（RO会）の設立に向け

動き始めました。同年11月に設立準備委員会が立ち上がり、令和4年の4月に発会を目指すこととしました。

設立時の趣意は「日本でも有数の規模を保持し、かつ我が国の防衛という極めて重要な任務を遂行する陸上自衛隊という組織に退官者組織がないこと自体が不自然であり、加えて現下の状況を踏まえると、陸上自衛隊の退官者が、組織的に陸上自衛隊を支援すべき時代が到来している」との考えで「全ての陸上自衛隊幹部退官者が心を一つにして、後輩である現役幹部自衛官とともにあることを共有し、それを形として組織を新設する」としています。

また本会の効率的かつ常統的な運営のため、既に一部の陸上自衛隊幹部退官者が入会している「公益財団法人借行社」との合同を目指すとしています。しかしこの時の合同の考え方に関して、立ち上げ時の理事の間で意見の相違があるまま陸修会の設立に至ったことが名称問題を複雑にしたものと残念に思います。陸修会は予定通り令和3年11月から陸自幹部退官者の会（RO会）設立準備委員会が設置された後、会の目的、事業、会員規程等が審議され令和4

年4月27日会の名称を「陸修会」して正式に発会しました。

設立準備委員会の立ち上げから陸修会の発会まで筆者は森理事長を補佐する立場で関わり、また新しい借行社のため「体制移行準備・実行委員会」(令和4年から「運営企画会議」に名称を変更)の時から陸修会との

合同を視野に入れて、数年に渡り定款等の変更を確認してきました。借行社は陸上自衛隊に対する協力・支援を重視した活動に移行し、実績もあるため、陸修会の目的、理念、事業内容もほぼ包含一致していることから、合同はスムーズに行くものと思っていました。借行社会員である陸自退職幹部と借行社とは縁のなかった後輩陸自退職幹部との意識、認知度の差があり、協議はすんなりとはいかず難渋しました。

3 合同協議の顛末

陸修会は令和4年4月27日に発会しましたが、陸修会の理事会組織が発足した時をもって借行社からの申し入れにより、陸修会との合同協議が令和4年8月から開始されました。今まで5回の合同協議が実施さ

されたが、合同協議では、入会手続き、

会員の寄附など会員規程を含む会員制度、合同後の名称などが協議の対象でした。会員制度などは比較的スムーズに行われたものの合同後の名称については借行社と陸修会では大きな隔たりがあり、合同に当たって最も焦点となったのが名称問題でありました。

借行社ではその焦点である名称問題については運営企画会議や令和4年の総会時のアンケートを踏まえて侃々諤々の議論がありました。アンケート結果では一概には言えないものの、借行社の名称を残してほしいという人達は従来会員、家族会員、二世会員に多く見られ、従前会員、家族会員等の方々の意見は先輩や父親などが守って来た借行社の名称を守って貰いたいという意見が多数でありました。

他方柔軟に名称を考えても良いのではないかとという人達は比較的若い会員に多く見られた。また富澤元理事長のように組織が新しく船出するからその組織にふさわしい名前前で出発するのが自然ではないかという意見もありました。

我々借行社の運営企画会議のメンバーの中には富澤元理事長のように名称は柔軟に考えてもいいのではな

いかとの意見を言う者もいました。一方で借行社という名称は陸軍の歴史ある名称であり、同じ国の防衛に任じた陸軍種である陸上自衛隊の退職幹部の集団が引き継ぐのが最もふさわしいとの認識で陸修会を立ち上げたのであり、借行社の名称は変えず引き継いでもらえと思った者もいました。私もその一人でした。

ところが8月15日の第1回合同協議の場において借行社の歴史と伝統は引き継ぐものの、名称については合同したことが明確になるような名称がふさわしく、「借行社」も「借行会」もそのままではふさわしくないと反対意見が提出されました。

運営企画会議ではそれを検討した結果「借行社」「借行」という名称は残し、借行社が陸修会と合同した

ことと新しい体制に変換したことが明確なメッセージとなる意味で「新生借行社」「新借行社」との名称を10月5日の2回目の合同協議で提案しこの「新生」「新」という冠を付けた「借行社」という名称を陸修会理事会で検討することになりました。11月14日予定していた陸修会理事

会に森理事長が体調不良のため出席

が叶わなかった陸修会懇談会において「新生」「新」借行社は再び否定され「陸修」と「借行社」または「借行」をつないだ名称の方がふさわしいとの意見が多数を占めました。

これを受けた11月24日の運営企画会議では様々な意見が飛び交いましたが、「借行社」「借行」という象徴的な名称だけは絶対に残し、改めて陸修会の言うことを尊重しつつ協議することにしました。

企画運営会議を含む借行社の多くの方は当初は借行社の名称が残らなければ「合同はすべきでない」「合同については延期した方が良い」という強硬な意見もありました。彼らの多くが借行社の諸先輩方に尊崇の念を持ち、これまで借行社の業務を引き継ぎ牽引してきたとの自負を持つているものです。私もその考えは十分理解するものの、陸修会との

合同が前提であり、名称にこだわり過ぎて合同ができなければ陸修会発会の意味はないとも思い始めてきたところでした。

11月28日第4回合同協議が開催され、議論した結果「借行社」は残し、陸修会の意見を尊重する形で「陸修」を残す、例えば「陸修借行社」とい

最後に

う案が最良であることを偕行社として表明しそれぞれ運営企画会議、陸修会理事会で審議することになりました。

そして令和4年12月22日の企画運営会議では、新しく陸上自衛隊の幹部退官者全体の組織と合同して、新しい偕行社となるという事を鮮明にするためには、偕行社と陸修会の名称を一緒にした「偕行と陸修を組み合わせた名称「陸修偕行社」を受け入れることとし陸修会に提案しました。

翌日陸修会は理事長出席のもと理事会を開き、先ず正式に「新生」「新「偕行社」は否決され、「陸修偕行会」「陸修偕行社」、「偕行陸修会」の3案をもって審議したが「陸修偕行社」で決着しました。それを受け令和5年1月10日第5回目の合同協議を開催し合同後の名称は「両組織が合同した新しい組織であることが、陸上自衛隊幹部退官者に広く認識される名称」「偕行社の良き伝統を引き継ぐべき組織であることが認識できる名称」の二つの要素を含ませるべき」という固有名称に対する強い思いが受け入れられ、ようやく「陸修偕行社」とすることで合意されました。

陸軍の元将校の方から偕行社の継承を委託されたものの一人として、完全な名称の維持が出来なかったことへの忸怩たる思いは否定しえないが、「偕行社」という名詞を残した新しい名称にすることは出来ました。名称変更が、従来の偕行社を支援して頂く人々や団体に加えて更に陸上自衛隊を支援する組織であるという事が鮮明になれば、陸上自衛隊幹部退官者の加入の促進や陸上自衛隊と密接な関係を持つ企業や陸上自衛隊を応援したいという賛助会員の増加にもつながるものと考えています。今回名称を変更することを前向きに捉え、偕行社の新たな発展に繋がるものと確信いたしております。

今後「偕行社」が未来に向けて維持発展していくためのスタート台に立ったものと思えます。従前会員の皆様を始め法人・賛助会員の皆様、とりわけ陸修会会員の皆様の協力はしには「偕行社」の維持、発展はありません。ともに陸上自衛隊に対する支援を充実・強化し、我が国の安全保障に一層寄与していきたいと思っておりますので何卒ご理解・ご協力の程をお願い申し上げます。